# 安楽寺だより

第１２号


紙面内容


２面　親鸞聖人のご生涯（その五）
３面　東本願寺報恩講団参の募集
４面　仏教豆知識（ご本尊について）



編集・発行　安楽寺住職　吉田　和良
名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
電話　〇五二（八四一）二六〇六

九月十三日、秋の永代経法要が勤まりました。二十二組の住職方による読経の後、ご法話を楳山正樹先生（教西寺住職）にお話しいただきました。以下ご法話の要旨を述べさせていただきます。

「暑さ寒さも彼岸まで」と申すように、お彼岸とは季節を表す言葉ですが、元々お釈迦さまの『慧眼見真　能度彼岸』のお言葉から来ています。「こちらの岸(此岸・娑婆)に住む私たちが南無阿弥陀仏のお念仏を頂くことによって必ずあちらの岸(彼岸・浄土)に渡しますよ」という意味です。

ある先生が「人生とはこんなはずじゃなかったを繰り返し、こんなもんかで終わっていく」と、おっしゃっていました。また私（楳山)がお世話になった先生が「人間は生きている間、不平不足を言う。これは私を含めて特別のことではなく、事実と気付くことが大事(生死の苦海ほとりなし)」と、おっしゃった。

皆さんは、健康で長生き、そしてコロッと死にたいと思いますか。皆が望むことですが、人間の事実をあらわす言葉ではありません。人間は老・病・死の身を生きていると、お釈迦さまは教えて下さっています。

南無阿弥陀仏のおこころを聞くことは、夢に惑わされている人生から覚めることです。あれがほしい、ああなれば幸せになるという人生、『煩悩具足の凡夫』（親鸞聖人）を憐れんで悲しんで、私たちにお念仏を届けて下さったのです。

お経はお釈迦さまのお言葉であり、善導大師は『お経は鏡のようなものです』（お経は私を写しだすもの）と申されています。お経に出遇わなければ、自分が迷っていることに気付かない。こんなはずじゃなかった人生を送っていることすら気付かない。自分の姿に気付きさえすれば、直すことができます。

あるご門徒さんが、「この薬のおかげで朝まで寝かせて貰える、有難い」と話していました。年を重ねると薬を飲むことは避けられませんが、お念仏にお育てをいただくと「おかげさま」と言える人生に出遇えるのです。称えたから病気がなくなるのではありません。老いるべき身・病むべき身・死すべき身をどういきるのか、その苦の根本に光が当たっていくことが教えに出遇うことです。(2面へ)

# 親鸞聖人のご生涯

## その五　流罪地・越後での生活

承元元年（一二〇七）親鸞聖人は、念仏停止への怒りを胸に流罪の地に赴かれました。三十五歳の年のことです。

聖人が流罪の地・越後の国府（現上越市）で出会われたものは、辺地の荒涼とした自然であり、その日を生きるのに精一杯の生活をしている人々のすがたでありました。

流罪人の初年度は貴賤男女の区別を問わず、一日に米一升・塩一勺を給与され、翌年の春になると種もみが与えられますが、秋の収穫が終われば米・塩・種の支給はなく、自給自足の農耕生活に明け暮れることになります。

聖人は、僧としての身分も奪われ、罪名は藤井善信（よしざね）。しかし、あくまで仏弟子として念仏を申す道を歩まれました。僧俗という社会的な身分階級などの区別を超えて、ほんとうの意味での人間の生き方に目覚められたのではないでしょうか。こうした中で、妻恵信尼と結婚し、子をもうけ、文字どおり肉食妻帯の一生活者となって生きて行かれたのです。

そして非僧非俗の自覚を持って愚禿釈親鸞と名のられました。煩悩を断ち切ることもできず、人間としての愚かさのまま生きるしかない民衆のひとりとして生きることの意味を問うていかれたのです。

## 『民衆のひとりとして生きる』

聖人、流罪上陸の地
雪の居多ヶ浜

（一面より）煩悩の教育は三秒で出来るが、人間の教育は三代かかると言われます。だからこそ、祖父母の存在は非常に大事です。人がほんとうに育っていくためには、長い年月がかかるのです。

---

楳山先生は、滋賀県のお寺の待望の後継ぎとして生まれながら、名古屋の教西寺様へご養子に来られました。

先生は最後に二通のお手紙を読まれました。一通は、突然の末期癌を告げられながら、病への苦しみや辛さの言葉はひとこともなく、只々、先生への感謝の気持ちと残される前ご住職の心配が綴られたお手紙でした。

もう一通は、待望の後継ぎをご養子に出すことになってしまった実母様のお手紙でした。恨み辛みは一言もなく、本来、教西寺様に生まれるべきところを、たまたま私のお腹に宿り育てさせていただいた。どうかご法務にご精進して下さいという内容でした。

私たちは、このようなお手紙を書くことができるでしょうか。ほとけさまのお言葉をお聞きした思いで涙があふれました。

やさしく、わかりやすく語ってくださった楳山先生のご法話に、ご参詣の皆さまはうなずきながら、自分自身の身に受けとめて静かに聞き入っておられました。

宗祖親鸞聖人東本願寺

## 御正忌報恩講団体参拝

参加者を募集します

日時　二〇一二年十一月二十五日（日）

集合　安楽寺会館前　午前七時

費用　八千円

定員　四十五名（定員になり次第締切）

別紙申込書にてお申込みください

宗祖の遺徳を偲びつつ、念仏のみ教え聴聞することをとおして「宗祖としての親鸞聖人に遇う」報恩講法要にぜひご参拝ください。

なお、ご本山二十五日午前法要は、二時間くらい（中日中・楽入）のお勤めです。

# 京都東山の名勝地

## 円山公園の南北にある二ケ寺を参拝します

平安時代末に比叡山東堂にあった青蓮坊を現在の地に移した寺で、代々天台座主が住房となりました。鎌倉初期、慈圓僧正は四度天台座主をつとめられました。親鸞聖人は九歳の時、青蓮院で慈圓についてお得度を受けられ、その後比叡山へ二十年に及ぶ修行に向かわれます。

宗祖親鸞聖人ご入滅後十年の文永九年（一二七二）に廟堂建てて、聖人の御影像を安置したのが起源です。本願寺東西分派後に、祖墳にほど近い現在地に祖廟として造営されました。その後、江戸時代中頃に拡充され、現在に至っています。

# 仏教豆知識

第十二回

## ご本尊について

お寺の本堂や各家庭のお内仏（仏壇）にご奉安されてありますのが、ご本尊・阿弥陀如来の尊像であります。

ご本尊は、南無阿弥陀仏のはたらきをわたしたち人間にわかるように「絵像」や「木像」という具体的なかたちをとっております。

この像を「方便法身の尊像」と申します。右手をあげ左手をさげたかたちで立っておられる尊像は、仏さまの円満なる智慧と、やみことなき慈悲のこころによって、苦悩に沈むわたしたちを救わずにはおかぬというおこころをあらわしています。

立像の真宗のご本尊は、「両足尊」とも申します。わたしたち人間は、自分の思いや分別に固執して苦しみ、なにか外なるものに頼らずにおられない存在であります。この人間のありさまを憐れみたも仏さまが、わたしたちに「独立者たれ、大地を踏まえて立ち上がれ」と呼びかけ下さる尊像であります。

わたくしたちがご本尊に手を合わせる時、仏さまから「汝はなにを宗として生きているのか」と問いかけられている自分に気付かされるのです。

その問いかけを通して、人生にとって大切なことに気付かされ、真の独立者としての歩みが始まります。

## 東別院法話ご案内

来る十一月二十三日（祝）

名古屋東別院で安楽寺坊守がご法話を勤めさせていただきます。お時間のご都合がつきましたら、ご参拝いただければ幸いに存じます。

福島原発事故から一年半が経ちました。原発の将来について様々な意見が出ていますが、立ち止まって考えることが大切だと思います。人間は自然から借りた土地で暮らしています。その自然への感謝の思いを忘れて、人間の論理や技術革新を進めてきた面もあります。そして、自然の簒奪を当然のこととためらいもなく肯定し、傲慢な人間社会を作り出してきました。原発事故は、人間が自然に支えられながら、自然を簒奪する矛盾に満ちた人間の歴史を多くのひとびとに気付かせました。